地域素材の古典を活用した地域教材の開発と説明

――加藤磯足『河の辺の翁物語』の第二話より――

濱千代　いづみ

一　はじめに

現在、地域に材料を得た地域教材を開発し、それを用いた学習指導に取り組むことが必要とされている。岐阜県及び隣接する地域を素材とする古典に『河の辺の翁物語』という短編集が伝わっており、いくつかの話は教材として開発するのに適している。今回はその中から第二話を取り上げることにした。

『河の辺の翁物語』は加藤磯足が著述編集したが、未刊行に終わった一書である。序文には門人 渡辺為寧の名前がある。加藤磯足は現在の愛知県一宮市の人、渡辺為寧は岐阜県本巣郡北方町の人であった。この書は磯足の最晩年にあたる文化二年（一八〇五）に成立したものである。全一七話の中の第二話に、「矢部氏なる人の娘」の話が歌物語の形態で掲載されている。この話は、その内容と収載の和歌とから、矢部正子の生涯に材料を得ていると判断される。矢部正子は、現在の岐阜県本巣郡北方町出身の歌人である。

今までに『河の辺の翁物語』の第二話と矢部正子とを関係づけて論じたものに市橋鐸（一九四三b）があり、そこでは第二話の全文を載せて紹介している。また、『名古屋叢書　第二十五巻　雑纂編(2)』に『河の辺の翁物語』が採録され、第二話の全文を読むことができる。しかし、この話は一般にあまり読まれていないようで、この話が教材化されたものも見ていない。

以下の章では、まず『河の辺の翁物語』の成立・概要・伝本、加藤磯足の生涯、渡辺為寧に関わること、矢部正子の生涯を説明する。次に、寛政二年（一七九〇）刊行の伴蒿蹊作『近世畸人伝』にある「矢部正子」伝と、『河の辺の翁物語』の第二話とを比較して記述内

容を整理し、後者が物語としての創作が進んでいることを示す。最後に、『河の辺の翁物語』より第二話を「矢部氏なる人の娘」と題して教材化を行い、学習指導に必要な情報を掲載する。開発した教材そのものより、諸事項の解説その他のほうが分量として多い。これらの情報が学習指導に参考として利用でき、発展的学習を考えるヒントになると予想するからである。

『河の辺の翁物語』の第二話は、編集者・物語の材料となった人物ともに地域の出身者であること、歌物語の形態の擬古文であること、内容がすぐれていること等から、地域教材として開発することに意義があると考える。

二　『河の辺の翁物語』の成立・概要・伝本

『河の辺の翁物語』は加藤磯足が著述編集し、刊行を勧められたが、未刊行に終わった一書である。全部で一七話の短編が収録してある。本書の冒頭に、門人 渡辺為寧、師 加藤磯足の順で序文が載っている。磯足は序文の末尾に「文化の二とせといふとしの神無月のつごもり」と記している。磯足の最晩年、文化二年（一八〇五）に成立したものである。この書を編集した動機と書名のいわれが磯足の序文に述べられている。要約すると次のようである。

磯足は美濃国北方（現在の岐阜県本巣郡北方町）に出向き、若者たちに古歌の解釈を講じていた。ある日、その里の立木助央という者が宿所に来て、近頃京都で聞いたという話を語り、それを磯足は書き留めた。帰宅後、今までに聞き覚えている話も書き加え、今後も書き続けようと思った。書名は友人の勧めに従い、大納言源隆国が宇治で著述編集したと伝わる『宇治大納言物語』に倣って、起（おこし）（現在の愛知県一宮市起）の河辺に住まいすることから『河の辺の翁物語』と名付けた。

今後も書き続けようという意思を持ちつつ、没年までの四年間にどれだけ書き留め得たか定かでない。

刊行を勧めたのは渡辺為寧である。そのいきさつが為寧の序文に紹介されている。これも要約すると次のようである。

為寧は、田舎人の有様を擬古文で表現した短編集に価値を見いだし、公表しないのを惜しんだ。しかし、磯足は、何の役にも立たないものだし、文化二年（一八〇五）刊行の石川雅望著『しみのすみか物語』を真似たと非難されるのも厭わしいと、刊行を許さなかった。為寧は『しみのすみか物語』との違いを挙げて刊行

を勧めた。

一七話全部に題名は付いていない。そこで、『名古屋叢書　第二十五巻　雑纂編（2）』（〈名叢書〉と略す）に掲載の「目次」を引用する形で仮題を次に紹介する。[1] これによって、各話の中身がいくらか透けて見える。

第一話　殺せし娘の亡霊と契をこめし話
第二話　復縁を求められし女、歌をもて拒絶せし話
第三話　蛇むすめの話
第四話　女の男となり変りし話
第五話　野晒しの画に賛をせし話
第六話　美濃ゆうべが池の椀貸し伝説
第七話　鯉の滝登りの図を描かせし話
第八話　花井臼の話
第九話　火に追われながら附合せし公卿の話
第十話　あな嬉しの某と渾名されし男の話
第十一話　捨子の歌に田舎人のだめをおせし話
第十二話　実枝卿と宣長大人の歌の暗合せし話
第十三話　怪鳥を食ひてあやしの力を得し男の話
第十四話　狐と契りし女の話
第十五話　親の仇をその場に於てうち取りし男の話
第十六話　野間大坊附血池の話
第十七話　老爺の若き女を娶りて長寿せし話

『河の辺の翁物語』の伝本は、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」によると三本存在する。このデータベースは『国書総目録』（岩波書店刊）の継承・発展を目指して構築されたものである。すべて写本であり、編著者の加藤磯足自筆のものではない。三本はそれぞれ、①大洲市立図書館矢野玄道文庫（背ラベルTヤノ一四　一五一）（〈大洲〉と略す）、②刈谷市中央図書館村上文庫（請求番号W一〇八〇）（〈刈谷〉と略す）、③早稲田大学図書館（請求記号ヘ一三　〇〇九二九）（〈早大〉と略す）に所蔵されている。[2]

①〈大洲〉の本文一丁表に「須岐乃屋蔵書」と「後楽閑人」の印がある。奥書に、加藤磯足自筆のものを天保六年（一八三五）二月二一日に書き写したことが、「すきのや清風」の名とともに記してある。「後楽閑人」は矢野玄道の号である。書写年の判明しているものでは最も古い。②〈刈谷〉は奥書に、教え子に南波某がいて、その父が加藤磯足の子であること、磯足の子に借りて写し、文久二

年（一八六二）六月二〇日に写し終えたことが、「嘷庵道人」の名とともに記してある。「嘷庵道人」は富永莘陽の号である。[3] これによって、『河の辺の翁物語』は磯足から子に伝わっていたことが分かる。そうであれば、書写年の早い①〈大洲〉も、磯足の子に伝来していたものを写したのであろうか。①〈大洲〉と②〈刈谷〉は二カ所を除いて字配りも等しい。③〈早大〉は奥書が無く、書写年不明である。

三　加藤磯足

加藤磯足の生涯について、『尾西市史』をはじめとする解説・論考等[4]を参考にして以下に述べる。

第一に、家族関係を中心に、年月の順に変化を見ておこう。磯足は、自筆の加藤家系譜によると延享四年（一七四七）一一月一五日、母の実家の日記によると延享五年一月二三日に誕生した。誕生日の相違する理由は不明である。父は尾張国中島郡起村（愛知県一宮市起）で本陣兼問屋場を務める加藤右衛門七敏光、母は同村で脇本陣を務める林浅右衛門定通の娘てる。幼名を梅之助といい、後に要次郎と称した。宝暦一四年（一七六四）、同村の横山又太郎の娘ちかと結婚し、翌年長女むろが誕生した。横山家も名字帯刀を許された名家であった。明和七年（一七七〇）、父の死去に伴い一一代目の家督を継ぎ、右衛門七と改めた。その後、妻てるとの間に子がなかったため、長女むろの婿に、美濃国開田村の高橋忠兵衛の息子順治を迎えた。婿は有済と号した。寛政一一年（一七九九）、この有済に一二代目の家督を譲り、隠居して寿作と称したが、同年、長女むろが子の無いままに亡くなった。その後、有済は後妻を迎え、坦という子をもうけた。文化二年（一八〇五）、妻ちかに先立たれた。文化四年（一八〇七）、尾張藩士園田十左衛門の娘を後妻に迎え、翌年長男の寿三郎が誕生した。しかし、家督は既に有済が継いでいたので、寿三郎は後に加藤家を出ることになる。この寿三郎が、伝本②〈刈谷〉の奥書に登場する磯足の子である。長男誕生の翌文化六年（一八〇九）一〇月一二日に、磯足はなくなった。江戸で客死したと考えられる。法名は貞西。同村の本陣山に松が植えられたが、墓碑は建てられなかった。本姓は藤原氏。碁を好んで石桟と号したこともあり、尾張の俳人加藤暁台に入門し、磊石という俳号もある。

第二に、学問について見ておく。磯足が学問に熱心になった動機は、明和元年（一七六四）、江戸からの帰途にあった朝鮮通信使が起本陣に宿泊したときに見聞した詩論に感銘したことにある。尾張藩の儒者磯谷滄州が、通信使の学者南秋月に自作の詩を示し、南秋月が短編で答えた。磯谷滄州は当時二八歳くらいで、磯足に大きな

刺激となったようである。

磯足は二〇代の安永年間（一七七二～一七八一）に、名古屋の国学者で歌人の田中道麿に入門した。道麿は安永九年（一七八〇）に本居宣長に入門したが、道麿存命中に磯足と宣長の師弟関係はなかったようである。[5] 道麿の二十三回忌のころ、磯足は道麿の略伝『しのぶ草』を著し、師の思い出を綴っている。

天明二年（一七八二）、尾張藩藩校明倫堂の初代督学になる細井平洲に入門し、儒学を学んだ。

天明四年（一七八四）に道麿が死去し、名古屋の道麿門下は宣長に次々と入門した。寛政元年（一七八九）三月二一日、宣長は名古屋本町四丁目の書林藤屋吉兵衛方で講義を行った。磯足は聴講し、その門下に入り、寛政二年二月下旬には松坂に宣長を訪ねている。寛政五年（一七九三）四月一五日に、京都からの帰途にあった宣長一行を墨俣（現在の岐阜県大垣市墨俣町）で迎え、自宿に招いた。歌会を開き、名古屋まで同行した。寛政一一年（一七九九）の長女むろの死に際して、宣長から弔いの文詞を受けている。享和元年（一八〇一）一〇月、宣長の死去に際し、松坂の山室山の墓辺で通夜をした。その間のことが『時雨日記』に記されている。同年、磯足は宣長の長子春庭に入門した。

このように年月を追って眺めると、儒者の試論に触発され、国学と和歌を学び、その途中で儒学を学びというように、磯足の学問には一貫しない部分が見られる。しかし、宣長の学問には深く共鳴できるものがあったようで、最期まで敬愛した。学問に対する姿勢は真摯であったが、宣長の歌「家のなり（業）なおこたりそねみやびをの書はよむとも歌はよむ共」[6] のように、家業に専念することを第一とし、学問は余暇に行うものであったのであろう。著作のうち『校異首書土佐日記』のみが、没後の文政元年（一八一八）に刊行された。

第三に加藤家一一代目としての活動を見ておく。

磯足は、安永二年（一七七三）から享和二年（一八〇二）までの本陣業務に関わる記録を、『不肖僥倖記』という冊子にまとめた。そこでまず、起宿に宿泊した大名たちとの関わり方をいくつか挙げる。

安永二年（一七七三）、陸奥福島藩主板倉備中守が本陣宿泊中に発病し、そのまま逝去した。病中から発棺までの献身的な対応は福島藩の人々に感銘を与え、磯足は深く感謝された。福島藩との関係は長く続き、返礼を受けたり、お礼に出向いて手厚く待遇されたりしている。[7]

天明元年（一七八一）には、若狭小浜藩主酒井修理大夫に差し上げた千渓作の一軸を、親友の形見だからとお下げ渡しを請い、お許

しを得ている。千渓は起村出身の狩野派の絵師で、磯足と親しかったが、この前年に亡くなっていた[8]。

磯足は本陣に止宿する大名たちに、たびたび和歌を献上している。尾張藩主徳川宗睦が、安永四年（一七七五）、鷹狩のため起宿で止宿した折には、慰みの品々の一つに千渓の軸も入れて友人の宣伝を怠らない。また、寛政元年（一七八九）、昼休みをとった折には、磯足は藩主を讃える和歌を献上した。

これらの関わり方から、磯足が止宿の大名たちに誠意を尽くして奉仕し、そのふるまいに如才が無かったことがわかる。

次に、村政への関わり方をいくつか挙げる。

安永八年（一七七九）、起宿内に盗賊体の者を泊め、無宿者を居住させたという理由で奉行所から叱責を受け、翌年、磯足を含む村政関係者たちは村法を制定し、風紀を取り締まった。天明元年（一七八一）、尾張藩では所付代官制度が始まり、起村も代官の要請を受け、制作したばかりの村法を改定した[9]。磯足を含む村政関係者たちは起村の風紀を取り締まり、未進金を完納し、さらに村内貧困者の救済などを進めて統治していく。これによって尾張藩の藩政改革に貢献した。

天明二年（一七八二）一月、磯足は細井平洲に入門し、講演に招いた。起村の村政に熱意を注いでいた時期であったので、平洲の教化活動に引きつけられたようである。同年九月、磯足たちの発案によって、木曽川の治水工事を自普請で行った。周辺の村々から労働力と費用の提供を受けることができたのは、平洲の起宿における講演の効果が大きい。

尾張藩は藩政改革に対する意見を求め、磯足はたびたび「磯足内達書」を提出して減税を上申している。しかし、尾張藩は税の増徴を図り、磯足の上申は届かなかった。平洲の教化活動を進めても税負担は軽減せず、農民の生活は向上しなかった。村政に尽力していた磯足は寛政元年（一七八九）に宣長と師弟関係を結び、国学と和歌に邁進するようになる。

磯足はこの他にも大きな調停に関わっている。たとえば、天明六年（一七八六）に助郷村々が起こした訴訟では、江戸で対決の結果、問屋場で助郷の代表が立ち会い監視するという評決が下った。文化六年（一八〇九）、磯足は再び助郷の訴訟解決に対応することになった。江戸での審議の過程で資料の提出を求められ、短期のうちに帰郷して江戸に向かった。老齢の磯足は江戸でそのまま客死したと考えられる。それは加藤家一一代目としての職務の最中のことであった。

このように加藤家一一代目としての活動を眺めると、磯足は当事者の立場に立って物事を見極め、村政にあたり、もめ事を調停し、

職責を全うした人物であったことが見えてくる。磯足の学問と本陣問屋としての活動とを切り離すことはできない。

四　磯足の門人　渡辺為寧

ここでは、序文に名前のある磯足の門人　渡辺為寧について述べる。渡辺為寧は現在の岐阜県本巣郡北方町在住の人であった。序文に「みのゝ国北方の里人　渡辺為寧」と見える。『北方町志』・『北方町史　通史編』[10]等の地域誌を参考にして、その人となりを北方町との関係で見ておこう。

渡辺一族は江戸時代中後期に酒造、木綿、種油をはじめとする数々の商売に成功し、本家・分家ともに繁盛した。その繁盛は北方町に商業的な繁栄をもたらしたという。総本家は代々渡辺惣左衛門を名乗った。五代目為雄は酒造を業とし、塩問屋株を預かり、美濃米を江戸に廻送して巨利を占めた。六代目為常は滝本流の書画に達し、俳諧に熱心で[11]、美濃派（再和派）の道統を継いで第八世となり、一楽庵と号した。文化一四年（一八一七）、六五歳で没している。

序文に名前のある為寧は、総本家の七代目渡辺惣左衛門である。為寧に至って家運はますます上がり、大垣藩・紀州藩等の御用金を用立てるほどであった。御家流の能筆で、和歌を詠んだ。また、本居春庭に入門したらしい。蹴鞠の技に上達し、飛鳥井家より免許を受け、邸内に蹴鞠場を設けたとされる。

為寧は北方の若者たちの一人として、磯足から古歌の解釈を受講した。本居春庭への入門にも磯足の影響が想像される。為寧にとって、磯足は自分の父為常より年長の師であった。為常の没年から推量すると、『河の辺の翁物語』が成立した文化二年（一八〇五）のころ、為寧は父から家督を譲られていただろう。磯足の著作の板行を資金面で支援する心積もりであったと推定される。

五　矢部正子

『河の辺の翁物語』の第二話、「矢部氏なる人の娘」の話は、その内容と収載の和歌とから、矢部正子の生涯に材料を得ていると判断される。そこで、矢部正子の生涯について、伊藤信（一九三七）・森銑三（一九四三）[12]等を参考にして以下にまとめる。

矢部正子は延享二年（一七四五）、現在の岐阜県本巣郡北方町に生まれた。父は善左衛門佳政、母は国枝氏。初名を久、後に呉という。一六歳のとき、安八郡結（現在の安八町）の大平光二に嫁ぎ、翌年、女児を産んだ。宝暦一三年（一七六三）一九歳のとき、愛人のいる夫に離別せられ、正子は女児を連れて実家に戻った。間もな

く兄と母とともに京都に移り、京都歌壇の重鎮である小沢蘆庵に和歌と書道を学んだ。和歌を通じて『近世畸人伝』の作者の伴蒿蹊とも親交を結んでいる。この他、茶の湯・香道・礼儀作法・長刀に至るまで広く学んだ。

明和七年（一七七〇）二六歳のとき、肥後の細川侯の姫君に仕える教育係として召し出され、女児を母のところに留め置いて江戸に移った。このとき呉の名を賜る。待遇はよく、評価も高かったけれども、そのことで却って同僚の嫉妬に遭うこととなる。翌年には失語症になってしまい、その後御前務めを辞した。京都に帰るつもりであったが、人に勧められるままに和歌を教え、学ぶ者は百人ほどにもなった。

明和九年（一七七二）二八歳のとき江戸に大火があり、正子は逃げ惑って生き残った。しばらくして安永元年（一七七二）四月、京都に残してきた女児が亡くなり、母も病気だと聞いて、急ぎ京都に戻った。しかし、帰り着いたときには母も病没していた。正子は人生の無常を感じ、出家して慧静と名乗り、寂室と号した。安永二年（一七七三）九月一八日の夕方[13]、二九歳で正子は亡くなった。亡骸は鳥辺山に葬られた。

エピソードの一つが夫との離別後、たまたま故郷に帰った折、夫が手紙を寄せたが、正子は一首添えて手紙をそのまま返したというものである。このエピソードは第二話の核に当たる。

矢部正子の歌集は、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」によると二種類存在する。一つは「正子集の中」と呼ばれるもので、新日吉神宮蘆庵文庫に写本が蔵されている。もう一つは「矢部正子和歌小集」と呼ばれるもので、刈谷市中央図書館村上文庫と広島大学図書館福井文庫とに写本が蔵されている。村上文庫のものは『女人和歌大系』第三巻に活字化されている。

六　『近世畸人伝』「矢部正子」伝との比較

『近世畸人伝』中の「矢部正子」伝（以下、ここでは〈畸人〉）は「正子集の中」の跋文を材料にして書かれている[14]。この跋文は正子の兄 矢部正直の記したものである。〈畸人〉は事柄を淡々と記し、正子と伴蒿蹊の和歌をいくつか掲載するという記述方法をとっている。『河の辺の翁物語』の第二話（以下、ここでは〈河辺〉）と〈畸人〉とに共通するのは、ある女性が夫の裏切りにあって離別し、復縁を求められたが、「秋にあひて」の詠歌によって毅然と断ったという内容を持つことである。以下に〈河辺〉と〈畸人〉とを比較し、違いの顕著な部分を箇条書きにして示す。

【〈河辺〉と〈畸人〉との比較】

① 時期が〈河辺〉には「今は昔」とあるが、〈畸人〉には無い。

② 名前が〈河辺〉には「矢部氏なる人の娘に久子といふ人」とあるが、〈畸人〉には「正子矢部氏、はじめの名は久子」、「名を呉とたまひ」とある。

③ 年齢が〈河辺〉には「三十にもたらで」とのみあるが、〈畸人〉には「年十六にして」、「十九といふ歳」、「二十六といふ歳」、「年二十八」と示してある。

④ 夫の住所名前が〈河辺〉には「近き里のなにがしが家」とあるが、〈畸人〉には「同じ国結の里大平氏」とある。

⑤ 夫との間に女児が生まれたことが〈河辺〉には無いが、〈畸人〉には「ひとりの女をまうく」とある。

⑥ 愛人のいる夫と別離するまでの事情が〈河辺〉には詳しく述べられるが、〈畸人〉には「忘られて」とあるのみ。〈河辺〉では「久子」の人物像が「露ばかりも物ゑんじなンどせず。いとおほどかにまめまめしうて有りける」と造形されている。

⑦ 夫と別離後、正子が京都に移り和歌・書道等を学んだことが〈河辺〉には無いが、〈畸人〉にはある。〈河辺〉では和歌・書道等を「をさなき程より」の特技として初めに紹介している。

⑧ 後の妻の振る舞いが〈河辺〉には詳しく述べられて「むくつけき事の多かりければ」とあるが、〈畸人〉には無い。ただし、〈畸人〉では後の妻に「子もいできたるに」とあるが、〈河辺〉には無い。

⑨ 夫からの復縁の申し出とそれに対する正子の詠歌の時期が、〈河辺〉では夫の再婚から連続した事柄として書かれている。そのため、夫の再婚と復縁の申し出との時間的隔たりが少なく感じ取れる。〈畸人〉では正子が京都から「かりそめに故郷にくだりたる時」とある。

⑩ 正子が再嫁しなかったことが〈河辺〉では正子の詠歌の時期の後にあるが、〈畸人〉では夫との別離の後にある。

⑪ 宮仕え先が〈河辺〉には「紀伊の殿の姫君」とあるが、〈畸人〉には「何がしの国の守の姫君」とある。

⑫ 宮仕えの後、江戸で歌を教えたが、大火にあい京都に戻ったこと、娘と母を相次いでなくしたことが、〈河辺〉には無いが〈畸人〉にはある。

②③④によると、〈河辺〉は登場人物に関わる事実を除くことで、普遍的な人物像を作ろうとしている。⑪は〈河辺〉も〈畸人〉も細川侯の姫君であることを変えている。⑥⑦⑧⑨⑩によると、〈河辺〉では教養豊かな人柄のよい女性が、夫による理不尽な裏切りのため

に離別し、後の妻の不躾に飽きた夫に復縁を求められたが、毅然と断った物語に作られている。①のように「今は昔」と説き起こし、女性の物語の中央に和歌が位置し、和歌の前部は和歌の詠まれた事情を説明しているごとくである。全体は歌物語の体裁をなしている。⑤⑫のように子どものことや女性の他の不幸は〈河辺〉で削除された。〈河辺〉は〈畸人〉と比較すると物語としての創作が進んでいる。

七　教材の開発

七．一　開発した教材

『河の辺の翁物語』の第二話を教材として使用できるように、通常の教科書の形式にならって教材本文を整え、語句の意味を注で添えた。教材本文の作成にあたって次のような操作を行った。

㈠　書写事情の明記してある〈刈谷〉を基準に置き、〈大洲〉・〈早大〉を参考にした。[15]

㈡　読みやすくするために、仮名の部分を適宜漢字に直した。

㈢　仮名を歴史的仮名遣いに直した。

以下、【教材本文】・【注】・作者・出典を載せる。

【教材本文】

河の辺の翁物語

矢部氏なる人の娘

今は昔、美濃の国の北方[①]の里に、矢部[②]氏なる人の娘に久子といふ人なんありける。をさなき程より、手[③]よく書き、女の手わざどもは更にも言はず、歌をさへいみじう麗しうよみける。近き里のなにがしが家に呼び迎へけるに、男、はじめは[④]になう思ひかはして有りけるを、いたう[⑤]あだめきたる男なりければ、また外に女を隠しすゑて、夜毎にかの女のもとに行きて、元の妻のためは心[⑥]づきなく、有るべくも有らぬさまにのみ、ものし振る舞ひけり。さりけれど、露ばかりも物[⑦]ゑんじなンどせず。いとおほどかにまめまめしうて有りけるを、男猶[⑧]いかに思ひけん、元の妻をば親のもとに返しやりて、かの女を呼びすゑてけり。この後の妻、外に有りける程は、とまれかくまれ、[⑨]よろづ男の心に違はじとのみもてなしければ、また無きものにをかしう見えたりしかど、呼びとりて後は心おごりて、[⑩]いと浅ましうむくつけき事の多かりければ、今更に面[⑪]無きやうなれど、いか

でまた元の妻を呼びとらんとて、人してそのよし言ひやりけるに、

秋の頃なりければ、

秋にあひてかれにしものを今更になにおどろかす荻の上風

とよみてうけ引かざりけり。その後異人にあはせんなンど、親はらからの言ふをも辞みて、紀伊の殿の姫君の御許にまゐりて仕へけるを、また心にもあらぬ憂はしき事の有りければ、つひに世を背きて、尼になりて行ひすまして有りけるに、三十にもたらで身⑬まかりしとなん。昔にも恥ぢぬ心ばへ、片田舎にはいとめづらしき人になんありける。

【注】

①美濃の国の北方の里　現在の岐阜県本巣郡北方町辺り。濃尾平野の北西に位置する平坦地。

②矢部氏なる人の娘に久子といふ人　矢部氏という人の娘で久子という人。矢部正子（一七四五―一七七三）を素材にしている。初名は久子。江戸時代中期の歌人。京都で小沢蘆庵（ろあん）に学び、伴蒿蹊（こうけい）と親交があった。

③手よく書き、……更にも言はず　文字を上手に書き、女の手仕事は言うまでもなく。

④になう　比べるものがないほど。

⑤いたうあだめきたる男なりければ　ひどく心が移りやすい男だったので。

⑥心づきなく、……振る舞ひけり　不愉快で、とんでもないことを言ったりしたりするばかりであった。

⑦物ゑんじなンど　恨みなど。

⑧いとおほどかにまめまめしうて　たいそうおっとりとして誠実で。

⑨とまれかくまれ　ともかくも。「と」「かく」は副詞。「まれ」は「もあれ」の縮約。

⑩また無きものにをかしう見えたりしかど　比べるものも無く魅力的に見えたけれど。

⑪いと浅ましうむくつけき事の多かりければ　本当にあきれかえり風流でない事が多かったので。

⑫秋にあひて……荻の上風　離別した夫が復縁を求めて手紙を寄越したことへの断りの歌。「秋」と「飽き」、「枯れ」と「離（か）れ」は掛詞。「なに」は副詞、どうしてまた。「荻の上風」は荻の葉をそよがせる風。

⑬身まかりしとなん　世を去ったということである。

作者　**加藤磯足**　一七四七―一八〇九　江戸時代の歌人・文筆家。尾張国中島郡起(おこし)村（今の愛知県一宮市）の生まれ。父の後を継いで右衛門七と名乗り、本陣問屋を務めた。そのかたわら、儒学を細井平洲に、国学を本居宣長に学び、若者たちに古歌の解釈を講じた。没後に著書『校巽首書土佐日記』が刊行された。

出典　**『河の辺の翁物語』**　文化二年（一八〇五）に成立したが、未刊行に終わったもの。作者が聞き集めた話群を擬古文で表現した短編集で、全一七話から成る。

本文は、刈谷市中央図書館村上文庫蔵の写本を基にしている。

七・二　教材の活用のために

開発した教材を活用するのに必要な情報を、【現代語訳】・【語釈】・【活用の方法】の順で以下に掲載する。【現代語訳】は教材として利用してもよい。『河の辺の翁物語』・加藤磯足・矢部正子等に関しては、前方の章で述べた内容を参考にしていただきたい。

【現代語訳】

今となっては昔のこと、美濃の国の北方の里に、矢部氏という人の娘で久子という人がいたという。小さいころから、文字を上手に書き、女の手仕事は言うまでもなく、歌までもたいそう見事に詠んだ。近い里の誰それの家に妻として呼び迎えたところ、夫の男は、初めは比べるものがないほど、心を通わせていたが、ひどく心が移りやすい男だったので、また外に女を隠し置いて、毎晩その女のもとに行って、元の妻に対しては不愉快で、とんでもないことを言ったりしたりするばかりであった。けれども、（元の妻は）少しも恨みなどしない。たいそうおっとりとして誠実であったのを、男はその上どのように思ったのであろうか、元の妻を親のもとに返しやって、例の女を（妻の座に）呼びすえてしまった。この後の妻は、外に有った時は、ともかくも、何でも男の心に違わないようにしようとばかり振る舞っていたので、比べるものも無く魅力的に見えたけれど、呼びとって後は思い上がって、本当にあきれかえり風流でない事が多かったので、今更にあわせる顔がない状態だけれど、何とかしてまた元の妻を呼び返そうと思って、人を介してその事を言いやったところ、

秋の頃であったので、

秋になって枯れてしまったのに、今更にどうして驚かせるように吹くのか、荻の葉をそよがせる風よ。（あなたに飽きられて別れてしまったのに、今更にどうして言い寄越すのですか。）

と詠んで承諾しなかった。その後、他の男との縁を取り持とうなどと、親兄弟の言うのも断って、紀伊の殿の姫君の御前に参って仕えたけれど、再び思いも寄らない嘆かわしいことが有ったので、とうとう俗世間に背を向けて、尼になって心を清く保ち修行に励んでいたのに、三〇歳にも至らずに世を去ったということである。昔の風流な人にも劣らない心構えで、都から離れた村里にしてはたいそうすばらしい人であった。

【語釈】

今は昔　今となっては昔のこと。物語・説話の冒頭に置かれる慣用句。今という現実世界に生きる読者を、昔の物語世界へ導き入れる働きをする。

美濃の国の北方の里　現在の岐阜県本巣郡北方町辺り。濃尾平野の北西に位置する平坦地。江戸時代に円鏡寺の門前町、商業地として繁栄した。

矢部氏なる人の娘に久子といふ人　矢部氏という人の娘で久子という人。「なる」は助動詞「なり」の連体形で、人名などを受けて「という」の意を表す。矢部正子（一七四五―一七七三）を素材にしている。正子の生涯に関しては前方の章を参照。

手よく書き、……更にも言はず　文字を上手に書き、女の手仕事は言うまでもなく。「手」は多義語、ここでは文字の意味。「手わざ」は縫い物・糸繰りなどのように手・手先を使う仕事。「更にも言はず」はサラニ・モ・イハ・ズの連続した慣用句で、言及するまでもないという気持ちを表す。

になう　比べるものがないほど。「になう」は形容詞「になし」（二無し、似無し）の連用形ウ音便。比べるものがないの意。

いたうあだめきたる男なりければ　ひどく心が移りやすい男だったので。「いたう」は「いたし」の連用形ウ音便で副詞的に使う。ひどく、はなはだしくの意。「あだめき」は「あだめく」の連用形で、色っぽく振る舞う、浮気に見える意。

心づきなく、有るべくも有らぬさまにのみ、ものし振る舞ひけり　不愉快で、とんでもないことを言ったりしたりするばかりであった。「心づきなく」は不愉快である、気に入らないの意。「有るべくも有らぬ」はアル・ベク・モ・アラ・ヌの連続したもので、とんでもない、もってのほかだの意。「べく」は助動詞「べし」の連用形で当然の意を表す。「のみ」は副助詞で、修飾する用言を強めて、〜するばかりである、ただもう〜する、のように訳すとよい場合が多い。「ものし」はサ変「ものす」の連用形で、「言う」「書く」など種々の動詞の代わりに用いる。

露ばかりも　少しも。「露」は陳述の副詞、「ばかり」は副助詞、

「も」は係助詞。打ち消しの語と呼応する。

物ゑんじなンど　恨みなど。夫から冷遇されることを恨んだり、夫の外の女に嫉妬したりすること。「物」は感情を表す語に付く接頭語で、なんとなくの意。「ゑんじ」はサ変「ゑんず」の連用形が名詞化したもの。「なンど」は副助詞で「なにと」の変化した語。

いとおほどかにまめまめしうて　たいそうおっとりとして誠実で。「おほどかに」は形容動詞の連用形で、性質がおおようでのびのびしているさま、おっとりしているさまを表す。「まめまめしう」は形容詞の連用形ウ音便で、誠実であるさま、まじめなさまを表す。夫に冷遇されても外に女がいても、心広く夫に尽くす妻が描かれる。

猶　さらに、その上に。副詞で、一層程度が増すさまを表す。男の妻に対する冷遇が、妻を離別するまでに至るさまが描かれる。

とまれかくまれ　ともかくも。「と」「かく」は副詞。「まれ」は「もあれ」の縮約で、「も」は係助詞、「あれ」はラ変動詞の命令形。あれやこれやの事態を認めつつも一つのことに重点を置こうとする気持ちを表す。

また無きものにをかしう見えたりしかど　比べるものも無く魅力的に見えたけれど。「をかしう」は「をかし」の連用形ウ音便で、人柄や態度が魅力的で好ましいさま。

心おごりて　思い上がって。後妻の豹変ぶりを描く。家の外にいたときは、妻の座を得るために「男の心に違はじ」という態度であったが、家の内を治める妻の座についてからは、思い上がりの激しい言動になった。

いと浅ましうむくつけき事の多かりければ　本当にあきれかえり風流でない事が多かったので。「むくつけき」は疎ましくなるほど無風流で品の無いさま。離別した妻が「手よくかき、……歌をさへいみじう麗しうよみける」人物であったことと対比される。

面無き　あわせる顔がない。この理由として、元の妻に対して不愉快で、とんでもないことを言ったりしたりしたこと、外の女を妻にするため元の妻を離別したこと等が挙げられる。

いかで　何とかして。副詞で「呼びとらん」にかかる。「ん」は意志の意味を表す。男が自ら「面無き」と思いながらも元の妻を「呼びとらん」とするところに、「いたうあだめきたる男」の一面が現れている。

秋にあひて……荻の上風　離別した夫が復縁を求めて手紙を寄越したことへの断りの歌。「秋」と「飽き」、「枯れ」と「離（か）れ」は掛詞。「ものを」は終助詞で詠嘆の意味。「なに」は副詞、どうしてまたの意味。「おどろかす」には心を驚くようにする意味の

ほかに、忘れた頃にたよりする、訪問する意味がある。「荻の上風」は荻の葉をそよがせる風。「萩の下露」とともに「秋はなほ夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」（藤原義孝『義孝集』）のように、秋の風物として詠まれる。「あはれとてとふ人のなどなかるらんもの思ふやどの荻の上風」（西行『山家心中集』恋）のように、飽きられた寂寥感を詠んだものや、「今はただ心のほかに聞くものを知らずがほなる荻の上風」（式子内親王『新古今和歌集』一四、恋歌）のように、訪れぬ人へのあきらめを詠んだものもある。

うけ引かざりけり　承諾しなかった。「うけ引か」は四段動詞の未然形で、承諾する、同意する意味。

異人にあはせん　他の男との縁を取り持とう。「あはせ」は下二段動詞の未然形で、結婚させる、いっしょにさせる意味。

紀伊　現在の和歌山県、三重県の南部。

心にもあらぬ憂はしき事　思いも寄らない嘆かわしいこと。「正子集の中」によると、同僚の嫉妬に遭い、心労により失語症になってしまい、その後御前務めを辞した。

行ひすまして　心を清く保ち修行に励んで。仏道の戒めを守り、心を清くして修行に励むさま。

身まかりしとなん　世を去ったということである。「となん」は格助詞「と」に係助詞「なん」の付いたもの。文末にあって、〜ということだの意味を表す。

【活用の方法】

地域教材「矢部氏なる人の娘」の活用方法として基本になるのは、教材本文を音読し、内容を理解することである。歌物語の形式になっていることを捉え、詠歌の修辞を理解するとよい。そして、編集者も話の材料となった人物も東海地域の出身者であることを確認する。

発展的学習を行う場合に次のようなことが可能である。

(1)矢部正子の生涯について調べ、教材の人物の描き方と比較する。

(2)矢部正子の詠歌を取り上げ、鑑賞する。

(3)『近世畸人伝』にある「矢部正子」伝との比較読みを行う。

(4)加藤磯足の生涯について調べ、近世期の社会との関わりの中での生き方をつかむ。教科の枠を超える学習になる。

ところで、高等学校の古文教材の定番に『伊勢物語』「筒井筒」がある。この話では、男女が幼なじみ同士で結婚したのであるが、夫に通い妻が出来、初めの妻はその夫を待ち、夫はその妻のもとへ帰って来る。そこで、次のようなことが可能である。

(5)「筒井筒」の登場人物の行動や言動と「矢部氏なる人の娘」のそれとを比較しながら読む。それによって学習者は教材の内容

への理解を深め、さらに登場人物に対して自己の考えを持つことができる。

八　おわりに

加藤磯足の著述編集した『河の辺の翁物語』の中から、第二話を活用して「矢部氏なる人の娘」という地域教材を開発した。編集者の加藤磯足も、第二話の材料となった人物の矢部正子も地域の出身者である。歌物語の形態の擬古文で書かれ、内容がすぐれていること等から、地域教材として開発するのに最適であった。

加藤磯足も矢部正子も公的機関の作成した地域誌の中では記述されている。しかし、二人の名前と足跡は、一部の人々を除き一般に知られていないようである。そこで、まず『河の辺の翁物語』の成立・概要・伝本、加藤磯足の生涯、序文を書いた渡辺為寧に関わること、矢部正子の生涯を説明した。次に、寛政二年（一七九〇）刊行の伴蒿蹊作『近世畸人伝』にある「矢部正子」伝と、『河の辺の翁物語』の第二話とを比較して記述内容を整理し、後者が物語としての創作が進んでいることを示した。最後に、『河の辺の翁物語』より第二話を「矢部氏なる人の娘」と題して教材化を行い、学習指導に必要な語釈・現代語訳等の情報を掲載した。その結果、開発した教材そのものより、諸事項の解説その他のほうが分量として多くなった。『河の辺の翁物語』の成立・概要・伝本の解説に始まり、開発した教材の語釈・現代語訳等の情報に至るさまざまな解説と情報を、学習指導にぜひ利用していただきたい。

地域に材料を得た地域教材を開発し、それを用いた学習指導に取り組むことは今後とも必要とされるであろう。第二話以外の話も教材開発する予定である。

注

（1）〈名叢書〉中の「河の辺の翁物語」は、市橋鐸氏が解説を書き、編集している。「目次」も同氏によると考えられる。市橋鐸（一九四二）に見られる仮題と比較すると相違が見られる。たとえば、第二話は「復縁を求められし女の歌よみ返して戻らざりし事」、第九話は「京の大火事の砌逃げまどひながら附合せられし公卿の事」とあり、「目次」の方が短くまとまっている。

（2）伝本のうち、〈大洲〉は国文学研究資料館の電子資料館で公開されている画像、〈刈谷〉は電子複写資料、〈早大〉は早稲田大学図書館の古典籍総合データベースで公開されている画像を利用した。

（3）富永莘陽は後に神墨梅雪と名乗った。この人物に関しては

〈名叢書〉で市橋鐸氏が詳しく解説している。

（4）『尾西市史　資料編一』・『尾西市史　通史編上巻』のほか、林英夫（一九六〇）、服部敏良（一九七三a）・同（一九七三b）、市橋鐸（一九四三a）、〈名叢書〉の解説等。

（5）道麿は書簡で宣長に自身の門弟の一人として磯足を知らせている（『本居宣長全集別巻三』の「来簡集一四四」）。

（6）七〇歳の時、松坂の門人 村上円方に贈った歌。

（7）全容は『尾西市史　資料編一』にある加藤家文書「諸事覚書　四」の「6　安永二年板倉備中守起宿にて死去の一件など覚書」参照。

（8）千渓のことを磯足は『三子伝』で紹介している。

（9）栗原礼奈（二〇一四）は安永村法と天明村法とを比較し、天明村法は、尾張藩の権威を借り、道徳的教化という装飾が施された地方統制に着手しようとしたものかと指摘する。

（10）『本巣郡志』も参照した。『北方町志』は大正四年版と昭和七年改訂版と存するが、文言に相違が見られる。

（11）渡辺一楽庵は、芭蕉の吟句「松の花潮干と知りて蝶が行く」が妥当でないとして、京都でついに句稿を探し求め、「松の花潮干しづみて蝶が行く」とあるのを発見し、俳名を挙げたという。それはともかくとして、二つの句には季語が複数入っている。

（12）『北方町志』改訂版・『本巣郡史』等の地域誌も参照した。

（13）矢部正子の逝去を伊藤信（一九三七）他は九月一九日とするが、森銑三（一九四三）に従う。

（14）森銑三（一九四三）に指摘がある。

（15）〈名叢書〉は〈刈谷〉を翻刻しているが、濁音符の有無のほかにいくつか誤りが見られる。以下に、〈名叢書〉の翻刻をページ・段・行を添えて示し、〈刈谷〉を丸括弧に示す。一五二下⑮有たる（有ける）、一五三上①すへて（すゑて）、同③物ゑんじ（物えんじ、「え」の横に「ゑ」）、同⑧見へ（見え）、同⑮うけひかざり（この横に「不承引」）、同⑯いなして（いなみて）、同⑰御許（「御」の横に「ミ」）。

文献

市橋鐸（一九四二）「『河之辺乃翁物語』解説」『国語国文学研究：論考と塗料』六　名古屋国語国文学会

市橋鐸（一九四三a）「亭長加藤右衛門七」『伝記』一〇―一二　伝記学会

市橋鐸（一九四三b）「矢部正子と加藤磯足」『伝記』一〇―一二　伝記学会

伊藤信（一九三七）『濃飛文教史』博文堂書店
大野晋　編（一九九三）『本居宣長全集別巻三』筑摩書房
北方町役場（一九一五）『北方町志』、復刻版　岐阜県本巣郡北方町（一九八九）
北方町役場（一九三二）『北方町志』改訂版、復刻版　岐阜県本巣郡北方町（一九八九）
岐阜県本巣郡北方町（一九八二）『北方町史　通史編』
栗原礼奈（二〇一四）「尾張藩藩政改革と加藤磯足」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』一五　愛知県立大学大学院国際文化研究科
長沢美津　編（一九六八）『女人和歌大系』第三巻　風間書房
中野三敏　校注（二〇〇五）『伴蒿蹊　近世畸人伝』　中央公論新社
名古屋市教育委員会（一九六四、再版一九八三）『名古屋叢書　第二十五巻　雑纂編（2）』
服部敏良（一九七三a）「加藤磯足の研究（上）」『芸林』二四―四　芸林会
服部敏良（一九七三b）「加藤磯足の研究（下）」『芸林』二四―五　芸林会
林英夫（一九六〇）「尾張における農民闘争と国学の基盤―草莽の国学者加藤磯足の村政改革運動を中心として―」『近世農村工業史の基礎過程』青木書店
尾西市史編さん委員会（一九八四）『尾西市史　資料編一』尾西市役所
尾西市史編さん委員会（一九九八）『尾西市史　通史編上巻』尾西市役所
本巣郡教育会（一九三七）『本巣郡志』
森銑三（一九四三）「矢部正子伝の新資料」『伝記』一〇―一〇　伝記学会